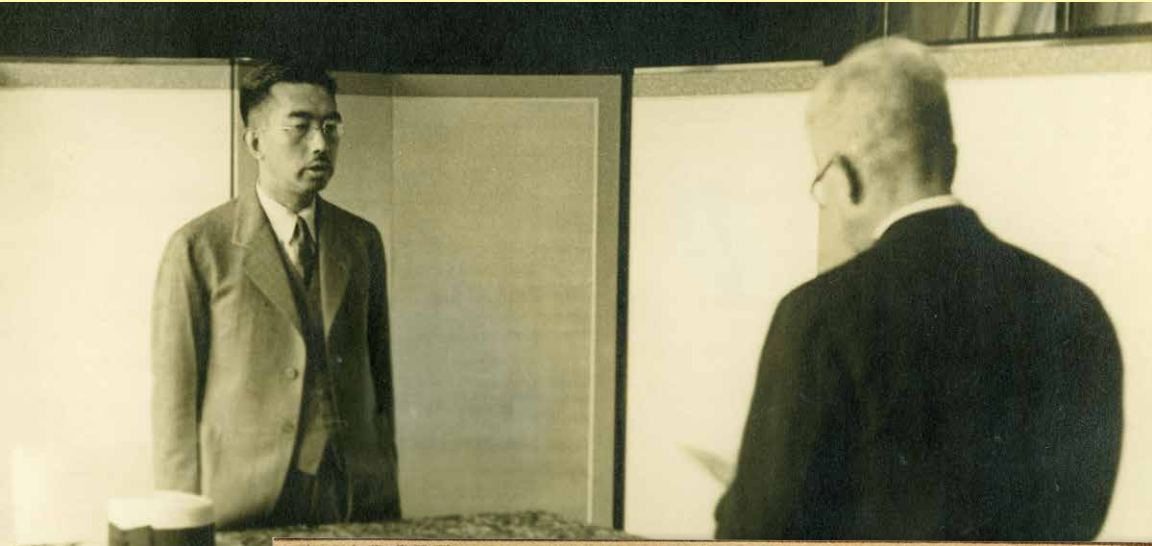




東北大学史料館 だより

No.23
2015 Sep.

TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES NEWSLETTER



Index

- 2 戦争と大学について
福島大学准教授 徳竹 剛
- 4 大学史の書棚から
吉葉恭行『戦時下の帝国大学における研究体制の形成過程』
資料の公開について
- 6 史料館のうごき
- 8 お知らせ
・秋の土日開館
・東北学院史資料センターとの連携企画展
・片平まつり2015



写真：左から昭和天皇、言上する佐武安太郎総長／総務課移管文書『巡幸に関する書類』
資料：『東北学生新聞』1947年7月7日号の切り抜き／学生課移管文書『風紀取締二関スル書類』

戦後の東北大学と学生

1947年（昭和22）8月6日、東北巡幸の一環として昭和天皇がはじめて東北帝国大学を訪れました。昭和天皇は職員・学生をはじめとする約5000人の「万歳」の声で迎えられ、金属材料研究所を見学、佐武安太郎総長以下の言上を受けました。佐武総長は1945年（昭和20）7月10日の空襲により全建物の3分の1にあたる延べ約8000坪の建物が焼失したこと、理学部・法文学部・工学部・金属材料研究所に被害が多かったことなどを説明し、「只今これ等の復旧に努力していますが…設備内容等はまだまだの状態です」と言上しています。

ちょうど同じころ、戦後の大学構内の廃頹ぶりを憂えた法文学部学生委員会の学生たちが「学園の雰囲気をもう少しアカデミックにしたい」と総長に陳情し、総長から「善慮」する旨の約束を取り付けます。しかし、何日経っても改善の努力を見せない大学側に業を煮やした学生らは再び総長に直談判します。すると今度は総長が「種々の事情により今はできぬ」と前言を翻し、総長と学生が「対立」する事態に発展します。事務局学生部の職員は一連の動きを洞察し、学生を「極めて真面目なものがみられる」と評価し、「最近の学生は、終戦後の一時的虚脱昂奮状態より二段三段脱皮し、相当真摯な考へを学生代表委員ともなれば持つており、また持たうとしている」と分析、「総長の一段の実意ある学生への態度」を望むとともに「こうした真面目な気分をなんとかして助成すべく百方手段を構ずべき」としています。

学生たちは戦中・戦後に何を体験し、どのような変化を来したのでしょうか。東北大学史料館では秋の企画展で戦争と学生の関係について考えます。

戦争と大学について

福島大学准教授 徳 竹 剛



筆者はかつて、「通年動員態勢下における学徒勤労働員—東北帝国大学法文学部伊勢崎隊—」という論文を『東北大学史料館紀要』（第2号、2007年）に執筆した。あとにもさきにも戦時期について書いたのはこれのみであり、そのような私が「戦争と大学について」と題して文章を書くのはあまりに不釣り合いではあるが、戦後70年を迎えるにあたって、改めて拙稿と伊勢崎隊関係の史料（石崎政一郎文書Ⅰ）を若干見直して、話題提供を試みたいと思っている。

東北大学史料館では、今から10年前の2005年（平成17）11月から翌年2月にかけて「[学徒]たちの「戦争」—東北帝国大学の学徒出陣・学徒動員」と題する企画展を実施した。筆者もこの企画展に携わり、学徒勤労働員先を各種史料から拾い集めて一覧表を作成したり、当時の学生レポートを翻刻したりした。

その後、企画展でも利用した石崎政一郎文書Ⅰ（法文学部勤労働員関係文書）の整理・目録化に取りかかり、その調査研究の成果として、史料目録と、上述の論文を書くこととなった。以下、石崎政一郎と伊勢崎隊について簡単に記しておこう。

東北帝国大学法文学部教授（労働法）石崎政一郎は、1945年（昭和20）1月から8月にかけて群馬県伊勢崎の航空機工場に動員された法文学部1年生の指揮にあたった。すでに前年2月の「決戦非常措置要綱」の閣議決定によって、中等学校以上の学生はいつでも学徒勤労働員に出動できる態勢を整えておくこととされており、東北帝大法文学部1年生は、45年1月末に中島飛行機の工場がある群馬県の伊勢崎に出動することとなった。この工場には、すでに盛岡工業専門学校・桐生工業専門学校の学生や周辺の国民学校等の勤労隊・女子挺身隊が動員されていた。この勤労働員は当初は3月末で終了する予定であったが、3月18日の「決戦教育措置要綱」の閣議決定によって、国民学校初等科以外での授業が停止され、「直接決戦ニ緊要ナル業務ニ総動員ス」ということとなり、伊勢崎での動員は継続された。

石崎政一郎文書Ⅰすなわち大学側からみた場合、伊勢崎での学徒動員の山場は3回ある。1回目は学生を伊勢崎に出動させるにあたっての工場側との折衝、2回目は3月末の動員期間の延長への対応、3回目は5月に入って活性化する東部軍による地域部隊編成への動きへの対応である。とりわけ、3回目の山場に関する石崎政一郎の報告書が興味深く、拙稿でも詳細に検討したところである。

ここでそれを繰り返すことは控えるが、要するに、東部軍の指導のもと、東北帝大の学生が中心となって、伊勢崎に動員されている学生による地域部隊が編成されることとなった。この地域部隊は、軍事教練の実施を目的とするものであり、それ以外の分野に及ぶものではないとされていた。しかし石崎は、この伊勢崎で結成された部隊よりも一足早く結成されていた太田・桐生の学徒隊の要綱をふまえ、東部軍の目論見は軍事教練の再生に止まらないことを指摘している。

すなわち、太田・桐生においては、教練に止まらず、学校報国隊が担っている機能をも担う組織として学徒隊が結成された。これは、配属将校制度や軍事教練の成績算入、配属将校の軍事教官への変更、文教政策への軍委員の参加などの延長線上にあるものであり、学校に代わって軍が教育を支配しようとしていることの表れであるという。

このような危機感を抱いた石崎は事態の推移を注意深く見守り、6月の伊勢崎での地域部隊の結成式に際しては、東部軍側から、5月22日に公布された「戦時教育令」に基づく学校報国隊が結成された場合には、

地域部隊は学校報国隊に吸収されることになるという言質を引き出すなど、学生を大学の側に留めおくための努力を重ねている。しかし、仙台から遠く離れた伊勢崎に、東北帝大の学生の一部が動員されており、その動員先において大学による教育が機能しているわけではなかった。さらに本土決戦が迫っているとされる中で、学生に期待される役割は工場での労働力であり、地域防衛の兵員であって、大学の学生であることには何の意味も無かった。となれば、学校単位に学生を組織することの合理性はどこにもない。石崎は「戦時教育令」以外に、学生を大学が組織することの根拠を見いだせなくなっていたのである。

筆者はこのような事例を手にしたとき、戦局が押し迫った段階において、大学というものの存在意義が全く失われてしまっていることを痛感した。もちろん、戦争に直接関与する研究分野はまた別であり、そのような研究分野から見た戦争と大学の関係は、また異なる理解が可能であるが、法文学部、いわゆる人文社会学系から見た場合は、大学のあまりの無力さに愕然とする。本土決戦も目前とされるような時期において、数週間、長くても数ヶ月先にしか視野が及ばないような世の中では、文字通り「即戦力」でなければ存在価値が与えられなくなっているのである。

敗戦から70年、幸いにして学生を戦争に動員するような事態は生じることなく過ぎてきた。目前のことしか問題にされないような非常事態を迎えたことは、おそらく無い。しかし、もし仮に「即戦力」でなければ存在価値がないとされるような時代が来たとするならば、何か深刻な事態が差し迫っていることを予期しなければならないだろう。それは学問にとっても、社会にとっても、戦時下に匹敵するような非常事態を意味しているのかもしれない。

最後に、勤務校である福島大学のことについて、少しだけ紹介させていただきたい。

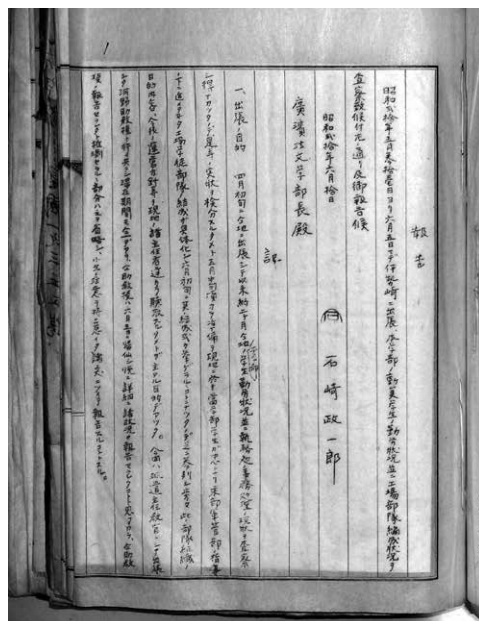
福島大学には、つい先頃2015年2月23日付をもって、福島大学資料研究所という「プロジェクト研究所」が設置された。「プロジェクト研究所」というのは、原則5年以内という期間を区切って設置される時限的研究所である。

この母体となったのは、福島大学貴重資料調査検討会という大学教職員の有志の集まりであり、2010年3月に『福島大学貴重資料集』第1号を発行して以来、現在まで4号を重ねてきた。その中では、歴史学、生物学、地質学などに関する学術的資料や福島大学の歴史に関する資料など、32件の貴重資料を紹介している。

大学の歴史に関する資料を体系的に残すという体制にはほど遠いものではあるし、公開体制があるわけでもないが、放っておいたら次々と失われ、忘れ去られてしまう学内の貴重資料を一つでも残していくために研究所を立ち上げることとなった。今後どのように展開していくのかは未知数であり、ささやかな一歩に過ぎないが、多くの方に知っていただければ幸いである。

福島大学資料研究所

URL : http://www.sss.fukushima-u.ac.jp/~kurosawa/IUMC_Fukushima_Univ/fukushima_ac.html



6月10日付石崎政一郎報告書



大学史の書棚から.....

吉葉恭行著『戦時下の帝国大学における研究体制の形成過程』

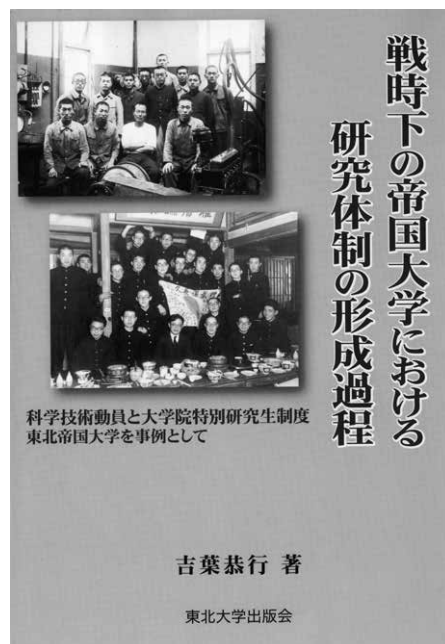
—科学技術動員と大学院特別研究生制度東北帝国大学を事例として—

本書は、これまで吉葉氏が当館の『東北大学史料館紀要』に寄稿した論文7編を基に、新稿を加えて纏め上げた力作である。氏はもともと技術史の専門家であるが、『東北大学百年史』の編纂に参加したことを契機として、大学史の研究にも着手し、その成果を本書に集大成したという知的探究心漲る研究者である。

科学史・技術史における意義は措くとして、大学史、とりわけ東北大学史における本書の最大の成果は、戦時における大学院学生の立場を制度・実態両面において明らかにしたという点である。これまで、戦時下における東北帝国大学の学生の実態については、学部生、とりわけ文系学生の学徒出陣・勤労働員の有様が知られているが、理系学生や大学院学生についてその詳細は明らかにされてこなかった。氏は史料の分析にとどまらず、当時の大学院学生（特別研究生）への聞き取りを通じて、大学院学生が大学の戦時研究、特に科学研究の遂行において重要な役割を果たしていたことを解明した。他の帝国大学の史料をも博搜して戦時下の帝国大学における研究体制の有様を浮かび上がらせた本書は、大学史一般に寄与するところも大であろうと思う。

実は、百年史編纂室からの御縁もあって、本書の索引の作成を手伝わせていただいた。事項索引については、組織名を引くと上位組織が一目で分かる（航空医学研究所なら東北帝国大学、航空技術研究所なら陸軍、航空研究所なら東京帝国大学など）辞書的機能を備えるなど、様々な工夫を凝らしたつもりであるが、索引はともあれ、本書は大学史・科学史・技術史のみならず、研究に携わる大学人一般にも手に取っていただきたい好書であり、一読をお勧めしたい。2015年2月東北大学出版会刊、4,000円（税抜）。

（小幡圭祐）



資料の公開について.....

※目録は当館ウェブページ「東北大学デジタルアーカイブズ」で見ることが出来ます。なお閲覧には個人の秘密情報などの保護を目的とした審査が必要な場合がありますので事前にお問い合わせ下さい。

◆特定歴史公文書

2015年（平成27）3月31日付で新たに2322点の特定歴史公文書の公開を開始しました。今回新たに公開された主な文書は下記の通りです。戦後、特に高度経済成長期における本学の歴史を語る上で欠かせない下記のような問題に関する重要資料を多く含んでいます。

①旧総務部総務課文書

- ・青葉山地区移転関係（開拓地区の用地取得、移転計画関係）：昭和30年代後半にはじまる青葉山地区への移転に関わる資料。戦後大学に先んじて同地区に入植していた開拓農民をめぐる関係機関との折衝や経緯、実際の移転計画の状況などが記される。
- ・教員養成課程分離独立（宮城教育大学設立）関係：戦後学制改革に際し本学に設置された教員養成課程を

新たに宮城教育大学として分離独立する際に発生した諸問題に関する資料。東北大学における教員養成の問題点や学内での検討状況等が記される。

- ・大学紛争関係：大学紛争が全国的に激化した1968年（昭和43）から69年（昭和44）頃を中心とする時期の本学の対応に関わる資料。学生による校舎の長期封鎖と大学・教職員・学生などの対応、機動隊導入による封鎖解除など紛争の様相を克明に跡づけることができる。
- ・大学改革関係委員会資料：1965年（昭和40）に設置された「東北大学管理運営検討委員会」や、1970年（昭和45）に設置された第一・第二「改革委員会関係」などの資料。大学紛争を契機に学内に設置され、その後の本学に於ける「大学改革」をめぐる議論の中核となった。

②旧人事課文書

- ・学長選挙関係資料 1960年代から80年代にかけての「学長選挙」の実施や関連する諸問題の検討委員会などに関する資料。
- ・外国人教師関係資料 1922年（大正11）から1980年代にいたる、本学で教鞭をとった外国人教師に関する書類。ウィーン大学から理学部生物学教室に招聘された世界的植物学者ハンス・モーリッシュ以下、様々な外国人教師の資料が含まれる。

③旧学務部・学生部文書

- ・学友会・課外活動関係 1960年代から80年代にかけての学友会運営や課外活動関係委員会などの資料。戦後高度成長期における学生課外活動の状況がうかがえる。
- ・学生問題関係 1960年代から80年代にかけての学生問題に関わる委員会や資料（学生ビラ）など。戦後東北大学の学生運動、学生問題に関する重要資料。

④施設部計画課文書

1990～2000年代の学内諸施設の新営・改修工事の竣工のアルバム。

⑤教育学部教授会文書

1951年（昭和26）から1966年（昭和41）にかけての教育学部の教授会・教官会議など。

⑥附属図書館文書

昭和初期から1960年代にかけての図書館運営に関する書類。

⑦広報課移管新聞スクラップ

本学総務課・広報課等で1960年代から2000年代にいたるまで集積してきた本学関係新聞記事の切り抜き。

◆個人文書

・ハンス・モーリッシュ関係史料

オーストリアの植物生理学者ハンス・モーリッシュ(Hans Molisch 1856～1937)は、ウィーン大学で学び、のち同大学の教授に着任。1923年（大正12）に東北帝国大学に招かれて、1925年（大正14）まで理学部生物学科の教授を務め、帰国後の1926年（昭和元）にウィーン大学の総長となりました。

本史料はモーリッシュが残した1921年～1992年の計140点からなり、Ⅰ同時代史料・Ⅱ後世の資料に分かれ、さらに前者を1研究関係・2書簡・3その他・4複製物、後者を1写真・2書簡・3その他に分類しています。主な旧蔵者は、相馬悌介、渋谷章、山崎裕などモーリッシュの教えを受けた方々で、東北大学教養部の相馬寛吉名誉教授（1926～95）が取りまとめて1982年（昭和57）に寄贈された史料と、追加寄贈史料から成ります。

史料館のうごき.....

◇第2回・第3回大学アーカイブズセミナーを開催しました（3月23日・7月15日）

昨年度より東北大学史料館の所蔵資料や実践経験をテーマに大学史やアーカイブズ学について学ぶ「大学アーカイブズセミナー」を開催しております。

第2回は、加藤諭氏（東北大学史料館・現東京大学文書館）が「近代日本の医学教育と解剖体」というテーマで、仙台医学専門学校の解剖体霊祭を素材として近代医療制度における解剖体需給の問題について報告を行いました（参加者6名）。

第3回は、秋の企画展の準備報告として、小幡圭祐氏（東北大学史料館）が「東北帝国大学における科学動員と大学院学生」、永田英明氏（東北大学史料館）が「東北帝国大学の学徒勤労動員」というテーマで、戦時における東北大学の学生の動向について報告を行いました（参加者7名）。いずれの回も活発な質疑応答が行われました。



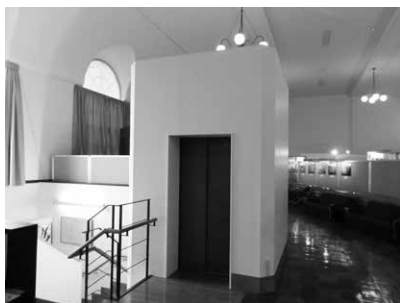
第3回セミナーの様子

◇東北歴史博物館特別展「医は仁術」に当館所蔵資料を出陳しました（4月18日～6月21日）

2014年3月15日～6月15日に国立科学博物館で開催された特別展「医は仁術」の巡回展が東北歴史博物館を会場として行われました。巡回展では、国立科学博物館での展示品に加え、当館からは1882年（明治15）に設立された宮城医学校や、中国の文豪・魯迅が留学したことでも知られる1901年（明治34）設置の仙台医学専門学校にまつわる文書が出陳・展示されました。

◇改修工事が完了・常設展示を再開しました（4月20日）

館内エレベーターの新設工事のため、2014年10月より2階展示室の一般公開をお休みしていましたが、このほど工事が終了し、展示室の公開を再開しました。これまで階段のみでご不便が多かった、車いすや杖などをお使いの方々にも見学しやすい環境になりました。また、エレベーター工事にあわせて、東日本大震災で落下してしまった瓦の葺き替えを行いました。葺き替えの際に撤去した瓦は、1925年（大正14）附属図書館本館として建設されてから現在に至るまでの、史料館の建物の歩みを跡付ける絵画・写真・看板などとともに展示を行いました。



◇第14回・第15回新公開資料速報展を開催しました（4月20日～6月30日）

常設展示の再開にあわせて、2つの新公開資料速報展を開催しました。まず第14回は、「脳脊髄神経の世界的権威—布施現之助文書—」と題して、東北帝国大学医科大学（後の医学部）の草創期に、解剖学教授として活動した布施現之助（1880～1946）の資料926点の中から、1912年（明治45）に完成した論文とその自筆原稿、博士論文の審査要旨など、布施の研究者、教育者、医療者としての各側面を示す資料を展示しまし

た。世界的な評価を得た名高い解剖学者である一方、学生に対し、さらには社会の中で、熱意をもって研究・教育活動等に取り組んだ姿を感じ取ることが出来るように思えます。

第15回は「教員養成課程の分離」と題して、今春公開の特定歴史公文書の中から、1965年（昭和40）の教員養成課程分立（宮城教育大学としての独立）に関する資料を展示しました。戦後東北大学に新設された教員養成課程は総合大学の利点を活かした教育を目指すものでしたが、昭和30年代に入ると文部省や地元教育界からその分離独立を求める動きが強まりました。学内でも賛否両論が分かれたまま最終的に分離独立が決定され、その経緯を含め当時とても大きな問題となりました。こうした動きの中で行われた学内でのやりとりにかかわる文書やこの問題に関する教育学部での教授会の資料を展示しました。

◇2015年度の法人文書の受入・評価を行いました（5月13日～6月22日）

2014年度末に保存期間を満了した法人文書の中から本学の「特定歴史公文書」として228点の法人文書を当館公文書室に受け入れました。あわせて、2015年度末に保存期間を満了する予定の文書の評価を行い、移管予定となる文書を選定しました（188点）。引継を完了した文書については、今後、内容などに関する点検調査を行ったのち公開する予定です。

◇「東北大学デジタルアーカイブズ」を公開しました

これまで東北大学史料館のウェブページでは、デジタルコンテンツとして、当館で所蔵している歴史公文書・個人文書等・学内刊行物の目録のほか、動画映像・写真については「東北大学動画アーカイブズ」・「東北大学関係写真データベース」をそれぞれ公開していましたが、これらを新しく「東北大学デジタルアーカイブズ」(<http://www2.archives.tohoku.ac.jp/tuda/tuda-index.html>)に統合することで、利便性の向上を図りました。統合にあたり、新たに「所蔵資料ギャラリー」を設け、上記のデータベースには掲載されていなかった当館所蔵の絵画・機器・衣類・図面・看板といった「モノ資料」の画像についても公開を開始しました。今後内容を充実させていく予定です。



◇第16回新公開資料速報展を開催しました（7月1日～9月18日）

東北歴史博物館特別展「医は仁術」に出陳していた展示品から、第16回「医学生生のノートに見る明治の「近代医学」と題して、本学医学部の前史をなす「宮城医学校」の卒業生、村山源三郎氏の医学校時代のノート（筆記録）を展示しました。宮城医学校は廃藩置県で仙台藩の医学校が廃止されたあと元藩医たちの努力で設立された医学校です。当館が所蔵するノートは、内科学・解剖学などの専門科目のほか化学・物理などの基礎科目を含め計40冊以上にわたり、その多くは教師たちの講義を口述筆記したものです。墨で丁寧な記された和装本のノートは、まだ江戸時代の香りが残る中で近代医学の修得に励む医学生生の熱意をそのまま物語っています。

◇第2回全国大学史展「学生たちの戦前・戦中・戦後」に当館所蔵資料を出陳しました（7月3日～8月2日）

全国大学史資料協議会東日本部会が主催する第2回大学史展が、明治大学博物館特別展示室を会場として行われました。当館からは、「東北帝国大学学徒隊」の看板や、「仮卒業証書」・1948年3月の卒業式答辞・東北大学イールズ事件関係資料を出陳しました。

秋の土日開館と企画展のご案内

今年も、秋の土曜・日曜開館を実施します。この間、戦後70年を迎えるにあたって、下記の企画展などを開催しますので、ぜひ足をお運びください。

●土曜・日曜開館実施期間 **2015年9月26日（土）～11月1日（日）**

※土曜・日曜の開館時間は午前10時～午後4時30分です。 ※祝日は休館します。

東北大学史料館×東北学院史資料センター連携企画展 **学都仙台と戦争**

東北大学史料館企画展

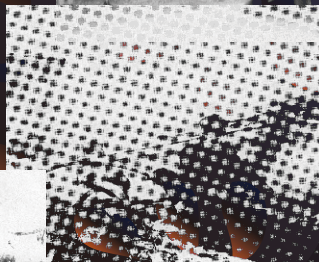
東北大生の戦争体験

2015.9/25（金）～2016.1/29（金）

※2015.11/2（月）以降の土・日曜、祝日、年末年始は休館

開館時間：午前10時～午後5時 入場無料

今年、戦後70年に伴う東北学院大学との連携企画「学都仙台と戦争」として、戦争と学生をテーマとした企画展を開催します。学徒出陣・学徒動員から、空襲・敗戦後の学生生活の再建まで、戦中戦後の東北大生の「戦争体験」を、未公開資料を含むさまざまな資料をもとにご紹介します。是非おいで下さい。



東北学院史資料センター企画展

ミッションスクールと戦争

2015.9/25（金）～2016.1/29（金）

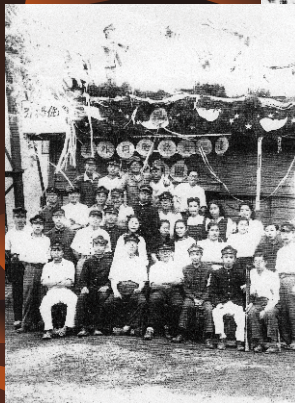
10/17（土）・10/24（土）は開館

※その他の土・日曜、祝日、12/25（金）、年末年始は休館

東北学院大学土樋キャンパス礼拝堂地下

東北学院史資料センター展示室

開館時間：午前9時～午後5時 入場無料



2015.10/24（土）開催

連携ギャラリートーク

「学都仙台と戦争」

●東北大学史料館
午後1時開始

●東北学院史資料センター
午後2時30分開始

※申込不要、詳細はウェブページにて

●東北大学附置研究所等一般公開

片平まつり2015

2015.10/10（土）～11（日）

東北大学片平キャンパスほか

史料館テーマ「たんけん！はっけん？しりょうかん」

体験コーナー：新企画★ めざせ！東北大学歴史博士

大好評◎ むかしの学生に変身／マシン・ボート体験

館長の
十銭とくわです



東北大学史料館だより 第23号 2015年9月15日発行

編集・発行 東北大学学術資源研究公開センター史料館

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区片平2-1-1 TEL 022-217-5040

E-mail desk-tua@grp.tohoku.ac.jp URL <http://www2.archives.tohoku.ac.jp/> Twitter @T_U_Archives